

## 蘇東坡と水陸会

### 一、はじめに

「溪声山色」の語に象徴されるように、宋の蘇東坡（名は軾、一〇三六―一一〇二）の詩が禅機を得ているとして、黄山谷とともに緇流の間でもはやされたことは一般によく知られている。またその文においても、佛像や佛閣の創建や絵事など、佛事に即して撰述されたものは「佛拳に暇がなく、後世の「翰墨をもって佛事となす」との評も射たものと言えよう。ただ、その事蹟を見ても明らかのように、東坡の参禅はけっして文学の範疇だけに止まるものではなく、一方では写経や印施に励み、あるいは放生や施餓鬼といった佛教儀礼の実践者として

### 吉 井 和 夫

の面も持ち合わせていた。とりわけ施餓鬼の一種である水陸会すいりくえは、その法会としての規模や傾注した意識の点で最も注目すべきものの一つと言つてよい。ただ、これまで水陸会についての数多の論考には必ずと言つてよいほど東坡への言及が見られるものの、その生涯を重ね合わせて法会の目的を探るといった姿勢はほとんど見受けられなかった。本稿はそうした点を些か補うため、東坡にとって水陸会とはどういう意味を持つ佛教儀礼であったのかについて考察してみたい。

まず、水陸会という日本ではあまり馴染みのない法会について、簡単に触れておきたい。水陸会は六道に輪廻して苦しむ多くの孤鬼に食を与えて救済するという施餓

鬼の一種で、水陸齋や水陸道場、あるいは悲齋会、無遮齋などとも呼ばれる。水陸会というその名称は、「所謂水陸なるものあり、諸仙は食を流水に致し、鬼は食を淨地に致すの義に取るなり」(『釈門正統』卷四)とあるように、まず清淨な土地と水がある場所を選び、そこに食を散じて施しを与えるというところからきている。その起源は、東坡自身が「在昔梁の武皇帝、始めて水陸道場を作る」(「水陸法像贊」)と述べているように、梁の武帝蕭衍(四六四―五四九)の時に始まったと言い伝えられてきた。<sup>①</sup> 現在遺されている水陸会についての文献の中で、このことに触れている最初のもは、宋の楊鐔が撰した「水陸大齋靈跡記」であろう。その内容をかいつまんで記しておく、梁武が夢に現れた神僧から、水陸大齋を行って六道に輪廻して苦しんでいる群靈を救えばこの上ない功德を得られると勧められたが、目覚めてから考えてもそのような法会は思い浮かばない。そこで宝誌禪師の助言に従って佛教經典をひもとくと、その中に修行中の阿難が恐ろしい姿をした焦面鬼王から無數の餓鬼に飲食を施さねばすぐに寿命が尽きると告げられたた

め、すぐさま釈尊の教えにしたがって施食を行ったところ事なきを得たという故事を見出した。そこで、梁武はそれに基づいて水陸儀文を書き上げ、天監四年(五〇五)二月十五日、自ら金山寺に出御し儀文にしたがって水陸会を行ったと言うものである。もっともこうした起源については、阿難の故事を載せた經典の訳出時期などから、現在では否定的な立場をとる人が多く、同様に一度廢れた法会を唐代に復活させたとされる道英禪師の話についても真偽の点で問題があるとされる。

ところが晩唐から五代になると、明らかに水陸会を行っていたことを物語る資料が徐々に現れはじめ、やがて宋代に入ると世間からいつそう注目を浴びるところとなり、それにもなつて後世に繋がる儀軌が確立されていった。楊鐔が梁武の儀軌に則つて撰したとされる『水陸儀』三巻はその嚆矢であり、それ以降も宗蹟、史浩、志磐などによつて類本の撰述がなされ、これらが明の株宏による儀軌の集大成へと結びついていったのである。<sup>②</sup> 一方、そうした盛況を現出させた要因の一つとして挙げられるのが、居士佛教の広まりである。居士佛教は宋代

の文化を担った士大夫層が佛教に傾倒し、多くの佛教儀礼にまで参画したことを指しているが、それは当然水陸会にも及んでいったのである。楊鏐や史浩が儀軌についての著述を遺したことがその端的な例であるが、そのほか東坡より以前に水陸会に関わった士大夫として、范仲淹や曾鞏、晏殊など、いずれも名の知れた人士を挙げることができよう。こうして宋代に佛教儀礼として確立した水陸会は、明清時代に至るまで中国佛教における最大の法会の一つと位置づけられ、多くの民衆の心を惹きつけたのである。<sup>3)</sup>

ところで、右に述べたような宋代における水陸会の隆盛を物語る書物に、宗暁が編纂した『施食通覽』一卷がある。<sup>4)</sup>これは唐から南宋に至るまでの施餓鬼全般に関わる經典や著述、靈驗譚などの中から主だったものを拾い集めて一書にまとめたものであるが、その中に楊鏐の「水陸大齋靈跡記」や宗暁の「水陸縁起」といった本格的な儀軌からの引用と肩を並べて、東坡の手になった文が幾つか収められており、改めてこの方面における東坡の存在の大きさを実感することができる。そこで次章で

は、その生涯をたどりつつ個々の法会に至る経緯について明らかにしていきたい。

## 二、東坡の生涯と水陸会

### ○金山寺における水陸会

東坡が最初に水陸会に接したのは、おそらく生まれてから二十一歳までを過ごした蜀の眉山（四川省）に於いてであろう。当時、蜀では水陸会を含め佛事が盛んに行われており、蘇家も厚く佛教を信仰していたので、佛教に傾倒する以前の若い頃に、既にそうした機会があったとしても何等不思議ではない。次項で詳述することになる「水陸法像贊」の一文で、「惟我が蜀人は、頗る古法を存す。其の像設を觀るに、猶典刑有るがごとし」と言い、こと細かに水陸会の儀式の次第を述べているのも、単なる知識の披瀝ではなく、そうした体験に裏打ちされたの言と受け取ることができよう。もともと、そうした体験がすぐさま自ら法会を行うことに結びつくことはなく、四十歳代後半になるまでは水陸会についての興味が

まだ希薄であったことを窺わせる。<sup>(5)</sup> 筆者が東坡の関わった水陸会として最初のものと考えているのは、この法会ゆかりの地、金山寺で行われたもので、以下それについて述べておきたい。

長江に浮かぶ金山寺（江蘇省）は、東坡にとつても折に触れて訪れ、多くの詩文を遺した特別な場所であった。とりわけ住持を努めた仏印禪師とは昵懇の間柄で、二人の交遊を物語る逸話は画題にもなるほど人々に知れわたっていた。ただ不思議なことに、この金山寺での水陸会について東坡自身が著した詩文は一切遺されておらず、それを窺い知ることができるのは、年下の友人で書家として名高い米芾（べいふう）（一〇五一―一一〇八？）が、次のような古詩を詠じているからである。

東坡居士作水陸於金山、相招、足瘡不能往、作此以寄之家  
東坡居士水陸を金山にて作す。相い招かるるも、足瘡ありて往く能わず。此を作りて以て之に寄す。  
東坡居士が金山寺で水陸会を催すこととなり、私も招かれたが、あいにく足を傷めてしまった

ので出かけることができない。そこでこの詩を書いて贈ることとした。

久陰障奪佳山川 久陰障奪す佳山川

長瀾四溢魚龍淵 長瀾四溢す魚龍の淵

衆看李郭渡浮玉 衆おほく看る李郭浮玉に渡るを

晴風掃出清明天 晴風掃き出だす清明の天

頗聞妙力開大施 頗る聞く妙力大施を開くを

足病不列諸方仙 足病列せず諸方の仙に

想応蒼壁有垂露 想まう応に蒼壁垂露有りて

照水百怪愁寒烟 水に百怪の寒烟に愁うるを照らすべし

長いあいだ曇り空がすばらしい山川の眺めを遮り、波も四方からこの魚龍の棲む淵へと押し寄せていた。ところが、かの李膺と郭太のように仲良く同船した多くの人々が金山寺へと渡ってゆくと、風がそれらを吹き払い澄み渡った空があらわれた。私はかねてより（金山寺では）大いなる法力で施餓鬼が行われると聞いていたが、足を病んでしまつて彼方此方から集まつてこられる方々と席を共にすることが叶わない。おそらく天地四方を祀る蒼壁が露のよう

に降り注ぎ、水の中で冷やかな川霧に苦しんで  
る多くの者達を照らし救って下さることだろう。

『宝晋英光集』 卷二

このように、米芾自身は足の病のため参加できなかったものの、東坡が金山寺で水陸会を行った事は、詩題や詩の内容から窺い知ることができるのである。

では、この水陸会はいつ行われたと考えるべきであろう。米芾が初めて東坡と面識を得たのは、流謫地の黄州（湖北省を訪れた元豊五年（一〇八二）三月のことであった。以来、二人の交遊は東坡の最晩年まで十九年の長きにわたって続いており、金山寺に集うことのできた機会も一度や二度ではなかった。<sup>6)</sup> その中で一つの答えを導き出したのが孔凡礼編『三蘇年譜』（二〇〇四年、北京古籍出版社）である。いったいに東坡の伝記や年譜は宋代より多く撰述され、後世になるに従って詳細さを増してくるが、それを集大成し父蘇洵と弟蘇轍を加えた三蘇の年譜としてまとめ上げたのが、現在最も詳細な年譜と評される同書である。その中で金山寺での水陸会につ

いては、東坡最晩年の建中靖国元年（一一〇一）、南遷からの帰途に行われたとし、その理由として清の翁方綱によって編まれた米芾の年譜、『米海岳年譜』（『粵雅堂叢書二編』所収）の同年の條に、二人が金山寺で親しげに交遊していることを温革という人物が記した文が引かれていることを挙げている。<sup>7)</sup> もっとも、同書も「蘇、米嘗て金山に晤するが似し。考を待つ」と述べているように、けっしてこの文の内容に全幅の信頼を寄せて繫年を導き出している訳ではない。実際、この前後の状況を推し量ってみると、東坡がこの年に二度まで金山寺を訪れ、しかも二度目に水陸会を行ったとするには、さまざまな面で無理が生じてくるのである。というのは、東坡が同年に金山寺を訪れたとすれば、それが可能であったのは六月の中旬に潤州に着いて後、常州に旅立つまでのほんの僅かな期間しか考えられないのである。さらに日々その身体をむしばんでいった宿痾を抱えての身であれば、常識的に考えて、金山寺には一度足を運ぶことから覚束なかったのではあるまいか。法会の時期を最晩年のこととする『三蘇年譜』の説は、こうしたことを斟酌

すると、実情に即したものとどうい言い難いのである。<sup>(8)</sup>

ところで、米芾に関する本格的な年譜は前掲の『米海岳年譜』以来、久しく世に問われなかったが、比較的最近になって魏平柱氏による『米襄陽年譜』（二〇一三年、湖北人民出版社刊）が刊行になった。これは米芾はもとより、東坡をはじめ彼に関わった人物についても丹念に調べ上げ、その事蹟をできる限り明らかにしようとする努力を、謂わば最近の研究成果を盛り込んだ労作で、そこには首肯できる新たな説が多く述べられている。この水陸会についての詩の撰述年についても、『三蘇年譜』の建中靖国元年説を採らず、それより遙か以前の元豊七年（一〇八四）のことと解し、「蘇軾潤州に至り、金山に於いて水陸を作し、米芾を召す。芾足疾を以て赴かず、詩を作りて之に寄す」と記した後、前掲の詩を引いている。これは東坡が黄州での五年にわたる流謫が解かれたため長江を下り、同年八月十四日に金陵を発つて金山寺を訪れた際のことを念頭に記したもので、この時米芾は金山寺のある潤州（江蘇省）に滞在していたため、同寺の法

会に招くことが可能であると考えたのであろう。

ところで、もし金山寺での水陸会が元豊七年八月下旬のことであるとすれば、東坡にとつて是非とも水陸会を催したい一つの大きな理由があった。それは、その直前の七月二十八日、滞在していた金陵で侍妾朝雲との間にもうけた幼子の蘇遯（幼名は幹兎）を一歳にならずに亡くしていることである。この時の二親の悲痛な思いは「去歲九月二十七日、黄州に在りて子を生めり……」（『蘇軾詩集』卷二十三）の詩からひしひしと伝わってくるが、とりわけ愛児を失った母親の嘆きは生半なことでは癒えるものではなかった。同詩の第二首には次のように言う。

我淚猶可拭　　我が涙は猶お拭う可し

日遠当日忘　　日びに遠ければ日に日びに忘るべし

母哭不可聞　　母の哭するは聞く可からず

欲与汝俱亡　　汝と俱に亡ぜんと欲す

このように、亡き子の供養は言うまでもないが、そこに

子供の後を追いたいとまで思い詰めている朝雲を何とか慰めようとの思いも加わって、この一月ほど後の水陸会に結びついたのではなからうか。

また、この水陸会の繫年を考えるにあたって、どうしても念頭に置いておかねばならないのは仏印禪師の存在である。仏印禪師了元（一〇三二〜一〇九八）は単に東坡をはじめ数多くの士大夫との交遊でのみ世に知られている訳ではなく、ここ金山寺や杭州の雲居寺など大刹の住持をつとめて民の教化に努めるかたわら、多くの弟子を育てあげるなど、当時の佛教界を牽引したほどの尊宿であった。その禪師が金山寺で行った水陸会がいかに人々を魅了したかについては、『施食通覽』に見える「仏印禪師、水陸を加持せし感驗」の一文を通して窺い知ることができる。

仏印禪師が金山寺に住していたときのこと、ある時、貿易商が寺にやって来て水陸会を催した。その夜はたまたま法事を取り仕切る僧侶幹が出かけていたので、禪師は仕方なく自ら法会を行った。この夜、早

瀬にもやってている魚釣り船があった。夜が更けたころ、ふと岸の上から声が聞こえてきた。「今宵、金山寺で催されている水陸会はたいそう立派なものだ。なんと楼ろ至如来しが自ら加持を行っておられるのだから」。漁師はこの鬼の声をはつきりと耳にし、そのため禪師に対して大いに尊敬の念を抱くようになった。こうした顕驗によれば、人物やその法力が優れていれば、鬼神も喜び勇んでその供え物を受け入れることが分るのである。

ここに言う楼至如来とは、現世に現れるとされる千佛中、最後の佛のことであり、それに比擬される話が生まれたところからも、仏印禪師が如何に尊崇され、その加持する水陸会が人々を惹きつけたかを窺い知ることができる。そうしたことを念頭に、今いちど米芾の詩に立ち戻ってみると、その中の「頗る聞く、妙力大施を開くを」の句は、単に金山寺での法会のすばらしさを言っているのではなく、「かねてより金山寺には佛印禪師という大徳がおられて、その玄妙な法力でおこなわれる水陸会の優

れていることは私のところまで聞こえてくる」という意が込められていると解せられるのである。こうしたことを考えあわせると、東坡は禪師の存在があったからこそ金山寺で水陸会を行おうとしたのであり、したがってその繋年は禪師在世中の元豊七年とするのがより相応しいのではあるまいか。

では、ことある毎に釈教文を撰した東坡が、なぜこの金山寺での、おそらく仏印禪師も加わつての水陸会に限って、全く詩文を遺こそうとはしなかったのであろうか。その理由を探るにあたっては、今いちど水陸会の儀軌に立ちもどって考える必要がある。前述のように、宋代において梁武の儀軌に則つたとされる水陸会を遺し伝えていたのは蜀の地であった。それはやがて中国各地に伝わり根付いていくことになるが、ほぼ同じ頃、楊鏐が『水陸儀』三巻を撰したのは、おそらくそれによって古い型が忘れ去られるのを危惧したためであろう。そして東坡が郷里に在って初めて水陸会に接したのも、それとさほど隔たっていない時期であると考えられる。東坡が楊鏐の『水陸儀』をどのていど意識していたかは定か

ではないが、その脳裏に刻みつけられた法会の型は、楊鏐のそれと同様に、紛れもなく蜀の水陸会に根ざしたものであった。これに対し、蜀を離れ各地に根付いた水陸会は、本来の簡素な儀軌から次第にかけ離れ、規模はより大きく、しかも過度に飾り立てたものに姿を変えていった。そのことについては楊鏐自身が「水陸齋儀文後序」(『施食通覽』)の中で、「案ずるに、蕭氏(梁の武帝)無遮斎を建つるに、其の儀甚だ簡なり。今行われし所者、皆後人事を踵かきね華を増し、以てその法を崇たかめ、津済に至らしむるの一とす」と記している。ここには具体的な地名は記されていないが、北宋の末に撰せられた宗頤の「水陸縁起」(『施食通覽』)には楊鏐の表現を踏まえつつ、「江淮の用いるところ、並びに京洛に行われしところ、皆後人事を踵かきね華を増し」云々と見えており、「江淮」は金山寺を、「京洛」は開封を念頭に記していることが窺える。開封はもとより繁華な都であり、貴頭の多い土地柄であるが、金山寺も揚州という交易などで巨利を得た者の多い街がひかえていたため、それらの商賈を相手にした法会はいきおい日数も人数も大きなものにな



り、俗に流れていったことが窺える。東坡が「世に随いて増広す」(「水陸法像贊」)と批判しているのもそれを指しているのであろう。したがって金山寺での水陸会は、愛児の供養としてはまことに時宜を得たものであり、その点では佛印に信頼を寄せたであろうし、それでこそ米芾を招く気にもなったのであろう。しかしそのことと、華やかな金山水陸のために文を遺すのとは別問題であり、自身の撰文が世に広まることを自覚していた東坡は、自らの思い描く水陸会を催した際にこそ、思うさま筆を振るってそれを顕彰しようとの心積もりであったに違いない。そしてそれが実現するのが、次項でとり上げる都開封での水陸会であった。

○開封・定州における水陸会

金山寺での水陸会が元豊七年に催されたとすれば、次ぎに記録が残っているのは、開封(河南省)と定州(河北省)、それぞれの地で行われたものということになる。ここでそれらを分けずに一つの項目としてまとめたのは、これら二つの水陸会が時に混同されてしまうことが

あるからで、次にそうした問題も含めて、各々の法会の様子を見ていくこととしたい。

まず北宋の都であった開封で催されたと考えられる水陸会から見ていくこととする。これについては、前項でも引いた「水陸法像贊」(『蘇軾文集』卷二十二)の一文が残されており、とくにその序文には法会の内容と行われた経緯などについて触れているので、ここにその全文を引いておきたい。

蓋聞浄名之鉢、属屢万口。宝積之蓋、徧覆十方。若知法界、本造於心。則雖凡夫、皆具此理。在昔梁武帝、始作水陸道場、以十六名、尽三千界。用狹而施博、事約而理詳。後世莫知、隨世増広。若使一二而悉數、雖至千万而靡周。惟我蜀人、頗存古法。觀其像設、猶有典刑。虔召請於三時、分上下者八位。但能起一念於慈悲之上、自然撫四海於俛仰之間。軾敬發願心、具嚴絵事、而大檀越張侯敦礼、樂聞其事。共結勝縁、請法雲寺法涌禪師善本、差扱其徒、修營此会、永為無礙之施、同守不刊之儀。軾拜手稽首、

各為之贊、凡十六首。

蓋し聞く、浄名の鉢は属に万口を鑿かしめ、宝積の蓋は徧く十方を覆うと。若し法界はもと心より造すことを知らば、則ち凡夫と雖も皆此の理を具えり。在昔梁の武帝、始めて水陸道場を作るに、十六名を以て三千界を尽くせり。用いること狭にして施すこと博く、事約にして理詳かなり。後世知る莫く世に随いて増広す。若し一二をして悉く数えしむれば、千万に至ると雖も周きこと靡し。惟我が蜀人は、頗る古法を存す。其の像設を觀るに、猶典刑有るがごとし。虔んで三時に召請し、上下に分かつこと八位。但だ能く一念を慈悲の上に起こさば、自然に四海を俛仰の間に撫せん。軾敬んで願心を發し、具に絵事を嚴にす。而して大檀越張侯敦礼、其の事を聞きて共に勝縁を結ばんことを樂う。法雲寺の法涌禪師善本に請いて、差其の徒を択び、此の会を修營し、永く無礙之施を為し、同に不刊之儀を守らんとす。軾挥手稽首し、

各おの之が贊、凡そ十六首を為る。

聞くところでは、『維摩經』に説いている鉢は多くの人々の腹を満たし、寶石を散りばめた天蓋はあらゆる場所を覆つて下さるとのこと。もしこの世界がもともと心によつて作り出されたものであると知つたならば、凡夫であつても皆こうした理解を身につけるであろう。むかし梁の武帝は始めて水陸道場を設けたが、それは十六名の者で三千世界を象徴し尽くしており、そのため用いたものは少ないが施しは広く行き渡り、やり方は簡潔であるが隅々まで理に適つていた。ところが後世ではそれらは忘れ去られ、時代とともに規模が大きくなり過ぎてしまつた。もし（それぞれの衆を）一から順にすべて数えさせたところで、千や万になつても覆い尽くすことなどできるはずもない。（それに比べ）ただ私のような蜀の人々のあいだには、まだ多くの古い法式が残されており、その画像の設定

ひとつをとって見ても、今なおその模範的な姿が宿っているようだ。それは（春夏秋冬の）三期に謹んで集まってもらい、八人ずつを上下に分け、ただひたすら慈悲の念を起こすというもので、それができたならば自ずとこの世界はまたたく間に慰撫されるのである。このたび私は恭しく発願して、儀礼に使う絵をすべて厳かにしつらえた。そうしたところ大檀越である張敦礼侯がその事を聞きつけて、一緒にこの優れた法縁を結びたいと願い出てこられた。侯は法雲寺の法涌禪師善本殿にお願いし、その弟子を少しばかり忖んで、この法会を設けて頂き、いつまでも礙げのない施しをし、共にこの長く伝わる儀礼を守りたいものだと言われる。そこで私は恭しく拝礼し、それぞれの衆に賛を著すこととした。それらは全て十六首となる。

ここでは『維摩經』に説く施食にはじまり、梁武の始めた儀軌の簡素な美しさと、それに比して本来の精神を

忘れ華美に走る法会への危惧が述べられ、最後はこの度の都での開催に尽力した人々への言及をもって締めくくられている。東坡が撰じた夥しい佛教的作品の中には、時として言葉への思い入れが強く出過ぎて、文全体の撰述意図が伝わりにくくなってしまうものが見受けられるが、さすがに水陸会に関するこの文は、長年の思考を経たためかすつきりと過不足なく書かれており、広く人々に伝えたいという東坡の意図を反映させたものとなっている。なお文はこの後、三千世界を象徴するところについては後述するとして、先にこの法会に関わった人物と水陸道場とされた寺院について触れておきたい。

この水陸会への参画を強く求めた者として名の見えている張敦礼は、汴（河南省）の人で、熙寧元年（一〇六八）に英宗の三女である祈国長公主を妻として左衛將軍駙馬都尉を授けられ張駙馬と称された。その伝は『宋史』巻四百六十四に載せられている。この水陸会以外に佛教的な事蹟としては、曹洞宗を復興させた報恩禪師に請うて法雲寺の住持に招いたことが伝わっており、篤く佛法を

信奉していたことが窺える。また、その張敦礼から水陸会の導師を依頼された法涌禪師善本は、おそらく哲宗の詔により大通禪師の号を賜り、法雲寺に住した釈善本（一〇三五～一一〇九）のことであろう。<sup>9)</sup> その伝は『禅林僧宝伝』巻二十九や『補続高僧伝』巻九などに見えており、それによれば善本は頼の人で董仲舒の後裔にあたり、両親が亡くなって後は仕官を選ばず、慧林宗本に師事して佛道に励み、その法を嗣いだとされている。

次にこの水陸会が行われた法雲寺についても少し見ておくと、同寺は神宗の熙寧四年（一〇七一）、張敦礼の妻の祈国長公主が冀国大長公主であった時に創建した寺院で、明の李濂『汴京遺蹟志』巻十に「法雲寺 南薰門外、雲驥橋の西に在り。元末の兵に燬かる」と見えているように、大中祥符九年（一〇一六）に増築された開封新城の南にある南薰門の近くに建てられていた。<sup>10)</sup> また『東京夢華録』巻三、大内西右掖門外街巷の條に、「麦稍巷口……以て南すれば街の東に法雲寺あり。又西に去りて横街に張駙馬の宅あり」と記されているように、それは張敦礼の邸宅から程近い場所でもあった。東坡は同寺

のために「法雲寺礼拝石の記」（『蘇軾文集』巻十二）や「法雲寺鐘銘」（『蘇軾文集』巻十九）といった文を撰しているが、とりわけ後者には元豊七年に詔によって圓通禪師法秀が住することになったが、寺内に梵鐘が無かったため、張敦礼が妻とともに提唱し、賛同者数千人を得て元祐元年に鑄造したことが記されている。これらから見て、同寺の住持には代々大徳が任ぜられ、張敦礼と大長公主の庇護のもと、東坡をはじめ多くの士大夫が事あるごとに集い大いに賑わったことが窺える。このように開封での水陸会は、この繁華な都に立つ大利で善本を導師として行われ、東坡もそれを蜀に伝わった儀軌を披露するための、絶好の機会ととらえたのであろう。

ところで、この文は蜀における伝統的な水陸会を引き継いだ、いわゆる眉山水陸の有様を後世に伝える貴重な記録とされているが、前項でも触れたように、当然それは楊鐔の『水陸儀』と同じ系統に属するものであった筈である。そこでそれを確かめるため、次に「水陸法像贊」と『水陸儀』に記す上堂下堂、各八位に分けられた十六衆の名称を列挙しておきたい。なお『水陸儀』そのもの

はずでに佚われているため、ここでは『施食通覧』に引く同書の「宣白召請水陸上下堂」の部分を参照した。

「水陸法像賛」 『水陸儀』

〔上八位〕

佛陀耶衆

達摩耶衆

僧伽耶衆

大菩薩衆

大辟支迦衆

大阿羅漢衆

五通神仙衆

護法龍神衆

〔下八位〕

官僚吏徒衆

天衆

阿修羅衆

人衆

地獄衆

餓鬼衆

〔上八位〕

佛陀耶衆

達摩耶衆

僧伽耶衆

大菩薩衆

大辟支迦衆

大阿羅漢衆

五通神仙衆

護法天龍衆

〔下八位〕

官僚吏徒衆

三界諸天衆

阿修羅道衆

人道衆

餓鬼道衆

畜生道衆

畜生衆 地獄道衆

六道外者衆 六道外者衆

これらには多少の字の異同は見られるものの、大筋では「水陸法像賛」と『水陸儀』とは同じ系統に属することが確認できる。ただそれだけに、地獄衆が『水陸儀』では餓鬼衆、畜生衆の後に置かれているのに対し、「水陸法像賛」ではそれらの前に置かれている一点だけは気になるところである。蜀の伝統的な儀軌はおそらく『水陸儀』に反映されていると思われるので、これは東坡独自の考えに基づいていると推察される。では地獄衆を餓鬼衆、畜生衆よりも人衆に近い存在と見なすこの考えはどこから導き出されたのであろう。ここで思い起こしたいのは、東坡の作品に稀にはあるが引用されることのある「破地獄偈」の存在である。「破地獄偈」は『華嚴經夜摩宮中偈讚品』に見える覚林菩薩の偈文で、人々が思い描く地獄の怖ろしさもすべて心の所産であり、それに気付けば地獄はたちどころに碎け散ってしまうという考えに基づいて詠じられたもので、施餓鬼の場ではしばしばこの偈文が唱えられている<sup>(11)</sup>。東坡の地獄観もそうした

延長上にあり、これを「水陸法像贊」の一切人衆の贊文では、

地獄と天宮は 同一の念頃にして

涅槃と生死は 同一の法性なり

と述べ、さらに一切地獄衆の贊文では、

法界の性を觀するに 起滅電のごとく速なり

惟だ心造なりと知らば 是れ地獄を破らん

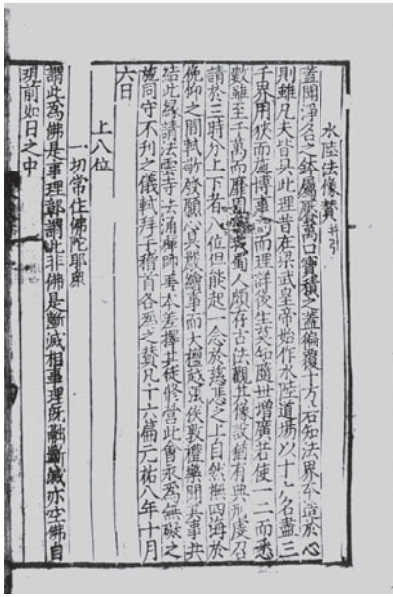
と表現している。つまり、これらに従えば人衆と地獄衆はあたかも表裏の関係にあることになり、これが「水陸法像贊」の撰文にあたり、殊更に人衆と地獄衆を並べようとした理由なのではあるまいか。但だ、ここでは以上のような推論を述べるにとどめておき、詳しくはさらに後考を俟ちたい。

ところで、前章の金山寺ほどではないが、この開封での水陸会についても繫年がいまひとつ明確ではないので、次にその点についても検討を加えておきたい。これについては従来から、東坡が定州に長官として赴任した元祐八年のことであると説があり、今でも時折これに基づいた論考を目にすることがある。これは『佛祖統

紀』卷四十七に「元祐八年、知定州蘇軾、水陸法像を繪き、贊十六篇を作る。世に謂く、辞理俱に妙なりと（原注、今人多く眉山の水陸と称するは此に由れり）」とあるのに基づいて導き出されたものであるが、ただ、これが右に引いた文の内容と著しく齟齬をきたしていることは誰の目にも明らかであろう。では何故『佛祖統紀』は、開封での水陸会を定州で催されたと誤って記してしまったのであろうか。それはこの項の最初に少し触れたように、同年の十一月十一日に東坡が定州で行った水陸会と混同してしまったことによると考えられる。

では、『佛祖統紀』の記述が誤っているのであれば、開封での水陸会は何時行われたと見るべきであろうか。これについて撰文の時期をはつきりと記しているのが、数ある宋版『東坡集』の中の一本、両足院本『東坡集』である。この京都五山の一つ、建仁寺の塔頭両足院に所蔵されている『東坡集』については、かつて拙稿でも取りあげて版本考察と一部の校勘を試みたことがあるので、改めて本稿での詳述は控えるが、ここで注目すべきは、同書卷百十に収める「水陸法像贊」の引（序文）の

最後に「元祐八年十月六日」の日付が見られることである(13)。他本に見られないこの日付により、宋代の開封における水陸会のみならず、東坡が著したその儀軌における重要な一文の繫年を、はじめて明らかにすることができるのである。



〔図〕 両足院本『東坡集』巻百十

ただ、この「元祐八年十月六日」の記載で一つ気になるのは、東坡一行が定州に到着した時期との関係である。東坡の定州赴任時期については、これまでも様々な年代考証がなされてきたが、現在のところ筆者は、遅くとも同年十一月一日までに到着していたとするのが穏当であると考えている(14)。では十月六日に開封にいた東坡が、十一月一日を越えることなく定州に着くことは可能なのであるか。当時、開封からは多くの街道が四方に伸びていたが、そのうち北に向かう一本はほどなく黄河を渡り、相州や真定を通過してほぼ直線的に定州へと繋がっていた。その間の距離は一千二百二十里(約四百五十軒)で、約半月あれば開封から定州に移動することは十分に可能であると考えられる。おそらく東坡一行はこの水陸会の開催を見届けたうえで、ほどなく都を後にし、定州に向かったであろう。

しかし、それにしてもなぜ東坡は定州赴任の間際という慌ただしい時期に水陸会を催したのであろう。それを考えるにあたっては、この前後に東坡の身辺に起きた重要な事項を次に列挙しておきたい。

八月一日 継室王閏之卒す。

九月三日 太皇太后高氏崩す。

この頃、次子蘇迨の妻歐陽氏卒す。

九月十三日 知定州軍州事とする命あり。

十月 哲宗による親政始まる。

十月六日 開封にて水陸会を行う。

十月 開封を發つ。(相州、真定を過ぐ)

十一月一日 定州にて「韓忠獻公を祭るの文」を撰す。

十一月十一日 定州にて王閏之のために水陸会を行う。

これを見ても分かるように、元祐八年の秋に東坡の人生にとって重要な意味を持つ女性が相ついで世を去っているのである。まず八月に入ってまもなく、二十五年間にわたり波瀾の人生をともしていた継室王閏之が亡くなり、ついで九月には東坡に何かと目をかけてくれていた宣仁太后高氏が崩じ、さらに師歐陽脩の息女であった次男蘇迨の妻も相前後して亡くなるなど、東坡にとっては心痛事が一時に重なった時期であった。しかし、定州への赴任時期は目前に迫っており、おそらく王閏之に対する供養がそうであったように、本来ならば開封での法会

は断念せざるを得なかったであろう。そういった情況にもかかわらず、東坡があくまで法雲寺で行うことに固執したのは、都で行ってこそ意味がある人物、すなわち皇太后の為の水陸会という意味合いが強く働いたのではあるまいか。宣仁太后高氏は英宗の皇后であり、子の神宗が崩御して後は幼い哲宗に代わって政務を取り仕切り、東坡をはじめとする旧法党人を何かにつけて擁護してきたことを思えば、その崩御に際し水陸会による供養を強く望んだとしても何の不思議もない。また王室に連なつた張敦礼が参加を強く望んだことも、そうした目的と無縁ではなからう。因みに水陸会を王室の一族の供養を目的とする例としては、梁の武帝が都皇后の追悼のために行ったことが知られている。

またそれに加えて、どうしても都で行いたかつた理由として考えられるのが、眉山水陸を天下に知らしめたいとの強い願いを抱いていたことであろう。前項でも触れたように、開封は繁華な都だけあって金山寺と同様に水陸会の儀軌には「増広」が加えられ、本来の面目を失いつつあった。そうした中でこの簡素を宗とする水陸会を



行うことは、法会の元来のあり方をもう一度人々に思い起こさせる格好の機会ととらえたのであろう。それは文中にこと細かに次第を記しているその書きぶりからもはつきりと窺われるのである。皇太后による垂簾の政が終わり、哲宗が親政で新法党を擁護しはじめるであろうことが予想される状況下、この機会を逃すと二度と都での法会など行えないであろうことを予感した東坡は、そうした切羽詰まった状況下で、水陸会にとつて無二の資料を後世に遺したのである。

開封での水陸会から一月余り後、東坡は赴任先の定州で亡き継室王閏之のために再び水陸会を行っている。前述のように、『佛祖統紀』が誤つて開封の法会と混同してしまつたのがこれである。それを東坡は「釈迦文佛頌」〔蘇軾文集〕巻二十の引の中で、次のように述べている。

端明殿学士兼翰林侍讀蘇軾、亡き妻同安郡君王氏閏之の為に、奏議郎李公麟に請い、敬んで釈迦文佛及

び十大弟子を描かしめ、元祐八年十一月十一日、水陸道場を設けて供養す。

開封での法会で眉山水陸について思うさま詳細に記したためか、あるいは赴任したばかりで慌ただしかったこともあつてか、ここでの書きぶりは極めて簡潔である。ただその中で水陸会としてはめざらしく日付を記しているのは、おそらく王閏之が亡くなつてちょうど百箇日目にあわせて法会を行ったことを明らかにしておきたかつたからであろう。言うまでもなく、百箇日は卒哭忌そつこくぎなどと呼ばれるように、四十九日などと並んで死者を弔う節目の日として重視されていたのである。

もう一つ、この文で気を付けておきたいのは、道場に諸尊を招請するにあたり、必ず掲げることになっている水陸画についてである。<sup>15)</sup>これは前掲の「水陸法像贊」にも「具に絵事を嚴にす」と見えているが、東坡がより具体的はどういった画像を掲げるかについて述べているのは、この「釈迦文佛頌」が唯一の例であり、『益州名画録』に見える張南本の事蹟を別にすれば、おそらく最

も古い記録の一つである<sup>(16)</sup>。その水陸画を依嘱された李公麟（号は龍眠居士。一〇四九？～一一〇六）は、以前から東坡と交遊のあった士大夫の一人で、山水や仏像、人物などの細密な画に優れ、当時の画壇の中でも際立った存在であった<sup>(17)</sup>。ことにその佛画は呉道玄の流れを汲んだもので、龍眠様と呼ばれる羅漢図や維摩詰像などで知られるが、水陸画として描いたことが確かな作品は確認されておらず、その意味でも見過ごすことのできない記録と言えよう。ところで、現在遺されている水陸画のうち完備したものは、明の祿宏が重訂した儀軌に則って描かれた明清時代のものがほとんどで、それ以前になると文献すら乏しくなり、不明な点も多いとされている。そうした中で、画そのものは現存していないとはいえず、この釈迦と十大弟子という、水陸会の起源に即した意匠の画を道場に掲げたとする記録は、もっと注目されてよいのではなからうか。

### ○南遷期における水陸会

定州に赴任した翌紹聖元年（一〇九四、四月十二日に

改元）、哲宗による親政が本格化するにしがたがって恐れていた元祐党に対する締め付けも厳しさを増し、六十に手が届こうかという東坡にも、黄州に続いて人生二度目の流謫が命ぜられる。しかもその地は天の一涯とでも言うべき嶺南地方であり、生還はまず覚束ないと思われた。ただそうした逆境にあつて、家族や友人以外にも東坡の心を支え続けたものがあつた。それが陶淵明や柳宗元の文学であり、そして黄州の時もそうであつたように佛教であつた。そして後者について言えば、この南遷と呼ばれる過酷な時期に、伝記や年譜に録された佛教的事蹟の多さが、そのことをよく物語っている。

その中でも水陸会に関係する事蹟として、ここではまず紹聖元年十月から同四年四月までを過ごした惠州（広東省）での水陸会について見ておきたい。東坡が惠州にやって来た時、土地の名士達はこの失意の文豪をもてなしたい気持ちはあつたが、中央で力を振るう章惇に恐れをなし、あえて近づこうとはしなかった。そのような情況の中、すすんで手を差し伸べたのが知事として赴任したばかりの詹範であつた。詹範は建安の人で、字を器之

と言った。彼が惠州に赴任したころは戦いのあつた後で、

野には甲われることの無い多くの骸が、風雨に晒されたままになつていた。彼はそれらの枯骨を集めて叢冢に納め、懇ろに弔つたのである。かつて東坡も徐州（江蘇省）に赴任していた折に枯骨を弔つた体験があり、おそらくそうした詹範の行為に、かつての自らの姿を重ね合わせていたのである。徐得之という人物に宛てた手紙の中で、「詹使君は仁厚の君子なり」（「与徐得之書」『蘇軾文集』卷五十七）と称え、さらにその法要に対して「惠州にて枯骨を祭るの文」（『蘇軾文集』卷六十三）、「枯骨を葬るの疏」（『蘇軾文集』卷六十二）、「惠州にて暴骨を官葬するの銘」（『蘇軾文集』佚文集編卷一）など三編もの文を撰しているところからも、その行為を顕彰しようとする強い思いを酌みとることができる。その中の「枯骨を葬るの疏」には次のように言う。

竊<sup>ひそか</sup>に見るに、惠州の太守、左承議郎、詹使君範は、在州の官吏と、朝典を奉行し、官錢を支破し、無主の暴骨數百軀を埋葬す。既にして其の形骸を掩覆し、

復た其の魄識を安存す。

ところで、この惠州での法会は『蘇軾文集』などでは単に「枯骨を葬るの疏」と題されていて、こういった施餓鬼が行われたのが不明であるが、『施食通覽』では同文を「水陸を修し、枯骨を葬るの疏」と題しており、同時に水陸会が行われたことを読み取ることができる。これはおそらく詹範の施餓鬼にあわせて、東坡が水陸会を行ったことを指すのであろう。もはや貴顕ではなく富裕でもない東坡であつたが、そうした者でも開くことができるのが本来の水陸会の、広くは佛教法会のあり方であることを、この惠州での水陸会を通して身をもって示したのである。

東坡は惠州で二年半を過ごした後、さらに遠方の儋州（広東省）に配流されたが、やがて哲宗が崩じ徽宗が即位すると、恩赦によりようやく北帰が許されることとなる。建中靖国元年（一一〇一）三月、北へ向かうその途次、東坡は虔州（江西省）に一ヶ月ほど逗留したが、そ

の地でも水陸会を行ったことが、次に掲げる「虔州法幢の下、水陸道場にて孤魂滞魄に薦むるの疏」(『蘇軾文集』卷六十二)の一文から窺い知ることができる。

苦海天に瀾るも、佛は彼岸を為り、業風浪を鼓るも、法は是れ慈航たり。諸佛子等、久しく三塗に墜ちて、備に万苦を嘗め、善友に遇わず、永く出期無し。今者各々佛前に於いて、同に此の願を發ごさん。願わくは無始以来の貪嗔惡念を除き、願わくは今日以後の清淨善心を發ごさん。願わくは行行坐坐佛に皈依し、法に皈依し、僧に皈依せん。願わくは世世生生財より遠離し、色より遠離し、酒より遠離せん。既に清涼の果を獲たれば、咸極樂の郷に躋らん。普く有縁なるを冀い、皆無漏なるを證せん。

もつとも繫年の点から言えば、東坡は六年半前に惠州に向かう際にも半月ほど虔州に滞在しているので、その時にこの法会を行った可能性も捨てきれないが、同文に見える「久しく三塗に墜ちて、備に万苦を嘗め、善友に遇

わず、永く出期無し」の表現は、自身の流謫と重ね合わせているように解せられるので、一応ここでは帰途のこととしておきたい。

ところで、同文には具体的な法会の目的については一切触れていないが、一つ考えられるのはこの法会もやはり親しい者を供養するために行われたのではないかと言うことである。それは、三年前に亡くなった友人の范祖禹(一〇四一—一〇九八)に続き、ちょうどこの頃、蘇門四学士の一人に数えられる秦觀(一〇四九—一〇〇)が流謫地から都へもどる途中、藤州(広西省)で亡くなったことを耳にしているからである。しかも、李廌に宛てて書かれた書簡「李方叔に答う、十七首」(『蘇軾文集』卷五十三)其の十七には、「某、自ら一身を以て罪を塞がず、朋友を坐累せしむるを恨む。……純甫(范祖禹)、少游(秦觀)、又安くの所にか罪を天に獲て、遂に其の命を断棄せらるるや」とあり、兩人が流罪に遭ったのは自分の責任であるとし、その命を縮めてしまったことを衷心より悔いているのである。おそらく東坡は、自分だけが生き延びて再び大庾嶺を越えられたことに氣

がとがめ、どうしても虔州で水陸会を行つて南遷期に命を落とした人々を供養をせずにはおれなかつたのである。こうして虔州での水陸会は、東坡にとつてあたかも贖罪のような役割を果たし、北帰にあつての心の整理をもたらししたのである。

### 三、まとめ

以上、東坡の関わつた水陸会について、これまで不明であつたか、もしくは疑わしかつた繋年を探りつつ、法会の全体像を把握することに努めてきた。それにより、一つには法会の主たる目的が、皇太后をはじめ親族や故知の供養にあつたことが次第に明らかになつてきた。こうした施餓鬼による功德を特定の人物の供養に振り向けることは、水陸会本来の目的からは外れているとされる説もあるが、その事の当否はさておき、東坡がこうしたことを主目的にしたことは、後世における法会のあり方に大いに影響を与えたであろう。

また、いま一つ東坡の水陸会の特徴として挙げるこ

ができるのは、その儀軌における古法を頑なに守ろうとしていたことである。こうした時流に反した簡素な儀軌へのこだわりは、もともと故郷である蜀の地で育まれたものであるが、それを晩年まで持ち続けたのは、単に蜀人であることの矜持からくるのではなく、水陸会というものゝ縑素の接点に成り立つ儀礼であるが故に、ともすれば俗に流れやすいという性格を本質的に孕んでいることを喝破し、それへの警鐘として訴えつづけたかつたからであろう。貧富貴賤に関わりなく参画できる儀礼をこそ目指すべきであるというのは東坡の佛事に関しての持論であるが、ことに水陸会が「華を増し」た場合、本来の甲意を忘れ一部の者のお祭り騒ぎに墮することを恐れたのである。それにしても、古法を重んじる姿勢は確かに東坡の一面ではあるが、これ程までにその変容を気にかけていたというのは、裏を返せば東坡にとつて水陸会はそれだけ思い入れの強い法会であつたと言ふことができよう。

本稿では、専ら水陸会について述べてきたが、東坡にはこのほか「徐州にて枯骨を祭る文」(『蘇軾文集』卷

六十三) や「古塚を祭るの文」(『蘇軾文集』卷六十三)、「施餓鬼文」(『蘇軾佚文彙編』卷五)といった施餓鬼についての文章も遺されている。このうち最初のものは四十代前半に赴任した徐州で撰せられたことが題名から明らかで、数多の水陸会より早くに行われているが、後の二篇については繫年はもとより、儀軌の点でもどういった形態をとっていたのかなど分からない点が多い。したがって東坡の中で、こうした施餓鬼はやがて水陸会へと収束していく前段階と位置づけることができるのか、或いは供養する対象によって使い分けられていたのか等といったことは、これから明らかにしていかなければならない課題であろう。

## 注

(1) 阿難の故事を載せる經典、実又難陀訳『佛説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』や不空訳『佛説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』、『施諸餓鬼飲食及水法並手印』が何れも初唐から盛唐にかけての訳出であることや、梁武や宝誌の伝に水陸会への言及が見られないことなどから、水陸会は唐代に入ってから作られた法会では

ないかとする見方がある一方、佛教や道教の諸資料に見える表現から、その相型はすでに晋代にはできあがっていたとする説もある。

(2) 楊鏐の『水陸儀』は北宋の熙寧年間(一〇六八—一〇七七)に世に広まったが、その後散逸した。宗暁の『施食通覽』には、その一部とされる「初入道場叙建水陸意」「宣白召請水陸上下堂」「水陸齋儀文後序」の三篇が収められている。次いで紹聖三年(一〇九六)に宗頤が『水陸儀文』四巻を著し、これも散逸したが「水陸縁起」の部分のみ『施食通覽』に収められている。また南宋になると乾道九年(一一七三)に史浩が儀文四巻を、咸淳年間(一二六五—一二七四)に志磐が『水陸新儀』六巻を著している。明代になって、その『水陸新儀』に基づいて株宏の重訂したのが『法界聖凡水陸普度大齋勝会修齋儀軌』である。

(3) 水陸会の儀軌については、鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』(一九八六年 大藏出版株式会社刊)、洪錦淳『水陸法会儀軌』(二〇〇六年 台北 文津出版社刊)、周耘『水陸法会の歴史的沿革と儀礼の構成についての研究』(『黄檗文華』第百三十号 二〇〇九年)に詳しい。なお後世、法会は七日間にわたり、夜にまで及ぶ壮大なものになっているが、これが宋代から確立していたかどうかは詳らかでない。たとえば元の延祐元年(一二二四)に金山寺で水陸会を行った僧応深は、「水陸大会を建つるの碑」(『金山志』)の中で七日間昼夜にわたって法会が行われたことを記しているが、同文には「特に隆侈の儀も

て大齋会を修す」ともあり、それがすべての法会にあてはまる訳ではなかったことを窺わせる。

- (4) 南宋の石芝法師宗暁が撰した『施食通覽』一卷は、嘉泰四年(一一〇四)の自序と開禧元年(一一一〇)の林師文の跋文を持つ。この書は単に施餓鬼についての文献を要領よくまとめた書というのとどまらず、他の文献には見られないものも多く載せている点で、この分野における重要な一書と評されている。日本でも、早くも仁治二年(一一二四)に円爾弁円が中国から持ち帰っており、東福寺普門院に納めた書物の目録である『普門院経論章疏語録備書等目録』の中に同書が見えている。さらに江戸時代の元禄四年(一六九一)に近江の安養律寺の沙門戒山という人物が、偶々京都で手に入れた本に基づいて刊行したことにより広く知られるところとなった。現在は、その和刻本を底本とした排印本が『新纂大日本統蔵経』第五十七巻に収められている。

- (5) 熙寧五年(一一七二)に詠まれた「是の白水陸寺に宿し、北山の清順僧に寄す」(『蘇軾詩集』巻八)の詩など、水陸会を執り行う寺院に宿ったにもかかわらず、それへの言及は全く見られない。

- (6) 喻世華氏は「蘇軾途經潤州次數及在潤州之交游考」(『中国蘇軾研究』第五輯)の中で、東坡が潤州を訪れることのできた期間について詳しく論じており、米芾や佛印禪師についても言及している。

- (7) 『米海岳年譜』に記す逸話は次の如くである。

温叔皮(革)が米帖の後に書き付けて言う、「京口の街の古老達が言うことには、建中靖国と改元された時、東坡先生は嶺外からの帰途、客人と金山寺に足を運ばれました。その時、ある者が先生に一同の名を書き付けてほしいと頼んだところ、先生は「米元章(米芾)が居るではありませんか」と仰いました。それを聞いて米芾が、「私は嘗て端明先生(東坡)に師事しておりました身。どうして私ごときが筆を執れましょう」と答えると、先生は彼の背中を撫でながら、「今では藍より出た青のようになられたではありませんか。米芾はおもむろに口を開いて、『先生は本当に私を理解して下さるお方です』と述べ、それ以来益々自信を深めるようになったということだ」と。

これについて塘耕次氏は『米芾宋代マルチタレントの実像』(あじあブックス16 一九九九年大修館書店刊)の中で「しかし、このよくできた話は蘇軾が米書を高く評価するようになった晩年のものとはいえ、米芾をやや誉めすぎている上に、蘇軾に金山に遊ぶ余裕があったかどうかなどつじつまの合わない点もある」と、この時期における金山寺での二人の邂逅そのものに疑問を呈している。

- (8) 南遷からの帰途の状況を年代を追って記すと、次の如くである。  
〔建中靖国元年〕

五月一日 金陵(江蘇省)に到る。

儀真(江蘇省)に到る。

程之元、銭世雄と金山寺に会す。

六月初旬 米芾と真州（江蘇省）の白沙東園で会い、西山書院に遊ぶ。

病に罹り、弟轍に書簡で後事を託す。

米芾とさかんに書簡を交わす。

十一日 米芾と別れ、真州から潤州に向かう。

潤州に到り、長官の王觀と会う。

十二日 甥の柳閔が書写した『楞嚴經』に跋す。

米芾と金山寺に遊ぶ。（温叔皮の跋文）

十四日 章惇の子、章援に書簡を送る。

十五日 舟で常州（江蘇省）に赴く。

病篤く、官界からの引退を願い出る。

七月二十八日 常州にて卒す。

(9) この文で東坡は善本を「法浦禪師」と記しているが、これは「大通禪師」の誤りであろう。

(10) 清の周城『宋東京考』巻十五には「法雲寺 麗景門外、雲驥橋の西に在り」とあり、開封旧城の東南にある旧宋門（麗景門）の近くに建てられていたかのように書かれているが、これは南薰門の誤りであろう。

(11) 東坡の「施餓鬼文」（『蘇軾佚文彙編』巻五）には、施餓鬼に際して「般若心経三卷、破地獄三偈、共に二十一遍を誦す」と記されている。

(12) 東坡の伝記や年譜は、『佛祖統紀』の誤りと「水陸法像贊」の実際の撰述年については全く触れていないか、たとえ言及しなくても年代の確定にまでは至っていない。例えば『三蘇年譜』

では、開封での水陸会について、同書の元祐六年八月の條に「駙馬都尉張敦礼（君子）、法雲寺の法浦禪師善本に請いて水陸道場を作す。軾たか為に「水陸法像贊」を作る。或は此の時の事為るか」と記し、定州の法会に先立つこと二年以上前に行われたものではないかと推定している。さらに元祐八年十一月十一日に行われた定州での水陸会について、『三蘇年譜』の同年の條（巻四十八）には『佛祖統紀』の当該の條を挙げ、「按ずるに、『文集』巻二十二に「水陸法像贊」十六篇有り。乃ち駙馬都尉張敦礼の為に作れり。『佛祖統紀』或は誤りて此の十六篇を定州の作と為すか。今しはち始く此に録す」と記し、『佛祖統紀』の内容に疑義を差し挟むにとどまっている。

(13) 吉井和夫「両足院本『東坡集』初探」（『神田喜一郎博士追悼中国学論集』所収一九八六年二玄社刊）、同「両足院本『東坡集』校勘記（三）一 釈教一」（『文藝論叢』第三十九号）参照。

(14) 東坡が定州に到ったのは、同年十月二十三日であると説がある。ただこの繫年は宋の傅藻『東坡紀年録』に「十二月二十三日、定州に到る」と記すものの、十二月は明らかに誤りであるため、二月前の十月二十三日を正しい日付であると決めつけたに過ぎず、信を置くことはできない。また十月二十五日に定州で孔子廟に謁したとされているが、これも「謁諸廟祝文」（『蘇軾文集』巻六十二）に赴任して三日目に廟に参拝したとあるのに基づいており、やはり二十三日の赴任から導き出したものに過ぎない。仮に二十三日が正しいとした場合でも、決してたどり着けないという訳ではないが、やや



慌ただしい感は否めない。なお定州における東坡の詳しい事蹟については、李占才『蘇東坡在定州』（二〇一三年 河北大學出版社）参照。

- (15) 水陸画については吳連城「宝寧寺明代水陸画」（『宝寧寺明代水陸画』所収 一九八八年 文物出版社刊）、カロリヌ・ジス・ヴェルマンド 明神洋訳「明、景泰五年在銘『水陸齋図』をめぐる図像学的考察」（『佛教藝術』第二百十五号）参照。

- (16) 宋の黄休復『益州名画録』巻上には、後蜀の中和年間（八八一～八八四）に蜀に流寓していた張南本が、宝曆寺に設けられた水陸院のために「天地地祇、三官五帝、雷公電母、岳瀆神仙、自古帝王、蜀中諸廟一百二十余幀」を描いたと記している。

- (17) 李公麟については曹樹銘「李龍眠之研究」（『大陸雜誌』第四十卷 第七・八期合刊）参照。

○水陸会を含め施餓鬼に関する論考のうち、本稿執筆の際に参照したものを次に挙げておきたい（注釈に引いたものを除く）。

- 牧田諦亮「水陸会小考」（『中国近世佛教史研究』所収 一九五七年 平楽寺書店刊）

石垣源瞻「施餓鬼放」（『西山学報』第十三号 一九六〇年）

宮澤正順「水陸会の起源とその内容」（『宗教文化』第十五号 一九六一年）

千葉照観「水陸会形成に関わった天台系の学僧」（『天台学報』第三十五号 一九九二年）

千葉照観「現中国で最も盛大な仏教儀式―水陸会―」（『大正大学綜

合佛教研究所年報』第十五号 一九九三年）

千葉照観「瑜伽焰口と水陸会」（『久久保良順先生傘寿記念論文集 仏教文化の展開』所収 一九九四年 山喜房佛書林刊）

坂本廣博「水陸大齋靈跡記」（『施食通覧』所収 をめぐって）（『観山学院研究紀要』第二十五号 二〇〇三年）

西山美香「五山禅林の施餓鬼会について―水陸会からの影響―」（『禅研究所年報』第十七号 二〇〇六年）

木村得玄「黄檗の施餓鬼」（『隠元禅師と黄檗文化』所収 二〇一一年 春秋社刊）

坂本道生「水陸会成立の経緯と展開について」（『天台学報』第五十三号 二〇一一年）

石上壽應「株宏における『水陸儀軌』重訂について」（『印度學佛教學研究』第六十一卷 第二号 二〇一三年）

本稿は、平成二十五年度の西山学会研究発表会（平成二十五年九月十一日、京都西山短期大学にて開催）において、「蘇東坡と水陸会」と題して口頭発表したものに大幅に手を加えたものである。発表の後、菅田祐準先生からは、西山浄土宗の寺院で盆施餓鬼会を勤修する際に読経される經典をお示し頂き、また施餓鬼会を水陸会とも呼んで回向することなど数々のご助言を頂戴しました。ここに慎んでお礼申し上げます。